

# 農村伝道神学校学報

学校法人鶴川学院  
農村伝道神学校  
発行人 高柳 富夫

## 適々農伝

大倉 一郎



はじめまして。四月より教師として教師会メンバーに加わりました。すでに五年前から非常勤講師として実践神学特講、世界キリスト教史を担当しています。それらの科目を引き続き担当すると共に教務部門の幾つかの仕事を担当します。なお、農村伝道神学校教師と併せて教団川和教会牧師を兼任しています。

担当科目に関しては、私の授業の場合、これまでも私の提案した基本的な宣教学のテーマから、神学生各自が課題を選択して研究するゼミナール授業を意図してきました。先行研究の文献や調査手法などは助言します。その授業の継続と充実を心がけたいと思います。多くの卒業生は、教会などの宣教現場に出ると、もっぱら一人で机に向かい学問研鑽を続けていく毎日にな

ることでしよう。その独学の環境を考えると、神学生時代のゼミ研究や卒業論文研究を通して、独学に耐えうる自律的な問題意識と探究力・解決力・表現力を身に付けていくように応援したいと願っています。

教務部門に関しては、わたしに課せられた大きな課題は、神学生の学業と農伝の特色が生きる研究を支えられる図書館蔵書の充実と運営です。さしあたり、他神学校や神学部

**安全保障関連法廃止！**  
**辺野古新基地建設反対！**

の研究紀要バックナンバーの欠巻補充の必要などがあると気づきましたが(ご寄贈などいただければ幸いです)、学内には農伝ならではの農村宣教にかかわる貴重な史料等が蓄積されていることも知りませんでした。それらの保全やアクセスに取り組みを感じます。その取り組みが、農伝図書館にアクセスする人々に有意義な知のデータを提供することになればと思います。

私は篤信の神道者の家系に生まれ育ち、大学生時代に求道して洗礼を受けて、その後、三十代で日本聖公会司祭になりました。しかし、深く期するところあって、日本基督教団に移籍して、神奈川教区の川崎戸手教会、溝の口教会の牧師としておよそ二十年間あまり働きました。十年前からは、一時期牧師職を離れ、フェリス女学院大学文学部の教員に赴任して、多文化共生学科目群とゼミ指導を担当しました。大学の定年退職を機に、出身の「北海道」に戻り、北海教区の教会での宣教に再

び教師として協力できたらと考えて、あれこれ準備してしました。ところが、お暇のご挨拶に伺った時に、まったく思いがけないことに、高柳富夫校長からお声をかけていただき、農伝で働く機会をいただいたのです。この方向転換にあたって、農伝はもとより北海教区の方々の温かいご理解とご協力をいただき、感謝でいっぱいでした。こうして、農伝生のみなさんと共に学び続けられる時を与えられたのです。

農伝赴任前までの十年間は、牧師職を離れて、社会科学・人文科学系の同僚たちの間で採まれたことで、神学分野とは異なる実証的研究とフィールドワーク教育に取り組む経験をしました。また、女子大でしたのでジェンダー、世代、宗教的アイデンティティなど、農伝生とは異なる点も多い学生たちと共に学ぶという経験でした。農伝に赴任して振り返ってみると、それらは得難い貴重な経験になったようです。そこで学んだことや、自覚した問題意識を、今後の神学教育と研究に生かしたいと願っています。

農伝は二〇一六年度から新カリキュラムに基づく研修コースの複線化や実習教育の充実をめざして大きな刷新を試

みようとしています。その試みに加われることに感謝を覚えるとともに今から心躍る思いでいます。知恵を尽くし、折りを深くして、神学生、教職員、関係者のみなさんと力を合わせたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

## 玉山神学院との交流

日本での実習を終えて

ピナ・パララヴィ

翻訳者 東のぞみ



玉山神学院の代表として、農村伝道神学校(以下農伝)との交流実習に参加する機会をいただき、心から感謝いたします。農伝は自然に恵まれた環境にあり、すばらしいと思いました。何より、先生方や学生の皆さんが歓待してくださったことが本当にうれし

かったです。言葉の壁はありましたが、みなさんと様々な手段を用いてコミュニケーションをはかりました。海外経験が初めての私にとって、それはとても新鮮なことでした。農伝で最も印象に残ったのは、授業中に、映画「セジャックバレ」について、みんなで議論をしたことでした。これまで、学校で霧社事件について学び、祖父から植民地時代の話聞いたこともありましたが、あまり深くは考えていませんでした。ところが、日本で歴史の問題に改めて触れたことで、自分自身の問題として受け止め直すことができました。また、日本が台湾を植民地として支配した歴史を振り返り、反省しておられる人々の姿を目の当たりにし、感動を覚えました。

農伝から次に、私たちは仙台のエマを訪ねました。三・一一震災当日の様子や津波の被害についてお話をうかがいましたが、目の前にいる家族を助けられなかった方の無念さや、自然の威力を前に何もできなかった人々のやりきれない思いを想像し、胸が痛みました。また、そうした被災地にあつてエマに連なる方々が、身を尽くして支援にあたっておられる様子に、多くを学びました。

その後私たちは会津に行き、ホームステイを経験しました。そこでは、かつてキリスト教徒が迫害されていた歴史や、暗号を用いて集会を維持していたお話をうかがい、かつてのキリスト教徒の強い信仰に、現代のわたしたちも学ぶべきところが多いと感じました。

東北での実習の次は、北海道でした。三浦牧師とデイヴアン牧師が同行してくださり、アイヌ民族の記念館を訪れました。そこでは、いまアイヌの人々が置かれている状況や、特に若者が差別を克服し、アイデンティティを受け入れながら、胸を張ってアイヌ民族として生きていこうとしていることをうかがいました。若い世代が、自らのアイデンティティを受け入れることが、どれほど難しいか、私も身をもって感じてきました。きつとアイヌ民族も困難を乗り越え、立ち上がることができると信じています。

次に訪れたのは、名古屋で日進市にある南山教会と隣接する日本キリスト教団の老人ホーム、それにAHI（アジア保健研修所）を訪ねました。その後、島しづ子牧師から障がい者の福祉施設を案内していただきました。そこでは、障がいをもった人たちが卒業

後に過ごすためのデイケア施設が必要であると感じられ、通所施設ができたことや、さらにナイトケアの施設ができた経緯などをうかがいました。島牧師にも障がいをもった娘さんがおられたことから、家族が抱える苦労や協力の大切さを感じ、お母さんたちと一緒に今の施設を立ち上げてこられたそうです。私たちもそこでメンバーの方々と一緒に食事をし、交流の時をもちました。スタッフが親身になって働かれています。メンバーの笑顔に感動し、人間の「生きる力」を目の当たりにしました。

各地での実習を終え、最後にまた農伝へ戻りました。井口さんに東京台湾教会の礼拝に連れて行ってもらいました。旅も終盤で、聞き慣れない日本語に疲れていました。台湾語と中国語だけの空間にほっとしました。教会の兄弟姉妹は暖かく迎えてくださいましたし、交流と分かち合いの時をもつことができました。

また、生田教会や川崎の教会も訪ねました。川崎では、在日韓国朝鮮人の方と交流し、日本社会で差別や様々な困難を抱えながら生活してこられた歴史や状況について学びました。そして牧師が困難を抱えた方々に寄り添って歩んで

2015年度台湾交換交流会計報告 (2015年4月～10月)

収 入		
2015/4～2015/7	献金(41件)	464,000
前年度繰越金		125,734
収入の部合計		589,734
支 出		
2015/4～2015/10	研修費(交通費・食費を含む)	243,266
2015/7～2015/10	通訳等の謝礼	154,294
合 計		397,560
次年度繰越金		192,174
支出の部合計		589,734

★ 2014年度会計：前年度繰越金 ¥210,274 次年度繰越金 ¥125,734

おられる様子に、頭の下がる思いがしました。

最後に、寿地区を訪ねました。前々から、実習から帰られた先輩方から、この地域について、何度も聞かされてきました。日本に対する私のイメージは、繁栄した経済大国、というものです。ところが、話に聞いてはいましたが、実際に日本にこれほど貧しい人々が暮らす地域があることを知り、愕然としました。き

つとほとんどの人がこの現実を知らない、あるいは目を背けていたのではないかと、思いました。けれども、ここでもやはり黙々と困っている人を助ける人の姿がありました。二日間過ごし、炊き出しや夜のパトロールに参加しました。私はホームレスの人を訪ねたり、炊き出しに参加するのは初めてでした。仕込みに配食、食後の洗い物など、すべての作業が効率よく流れていま

た。台湾でもホームレスを見かけますが、まるで視界に入っていないかのような生活をしてきました。しかし、寿での活動を通して、改めてホームレスの人々にもそれぞれの事情があること、多くの人が望んで野宿をしているのではないこと、さらには貧困に対する政策の問題点や日雇い労働の現状などを知り、これまでも自分が無関心であったことが恐ろしくなりました。愛の反対は無関心であるといえます。それなら、一方で無関心を抱えた私が、どうやって他方で愛を語ることができるようか。

日本で過ごした日々は、本当に貴重な経験となりました。実習中に聞いた、ある方の言葉が脳裏に焼き付いています。それは、「私たちは教会の中だけで福音を語るのではなく、外に出て行くべきなのです」という言葉です。日本ではあまり大声で語られる福音は耳にしませんでしたが、生活において、また行動の中に、福音が示され証される姿が印象的でした。私自身のこれからの歩みも、これに連なるものでありたいと願います。この度は、すばらしい交流実習の機会をいただき、本当にありがとうございました。

### 修養会報告

松田 拓実

「日本の〇・四%にも満たない人口の沖縄に日本の七五%の米軍基地が押し付けられている」。この一言は、修養会から四ヶ月経った今でも重たく心に響いています。二〇一五年度農村伝道神学校修養会では、大正めぐみ教会からウチナンチュ（沖縄語で「沖縄の人」）である上地武先生をお呼びして、二日間に渡り沖縄の基地問題や教団の合同のとなえなおしについて学びの時を持ちました。辺野古基地建設の抗議活動が続いているにも関わらず、私達はあまりにもこの問題について無知であったからです。ここで注意しなければならぬのは、私達は「沖縄を抱えている問題」を学んだのではなく、「日本が抱えている問題」を、日本が一方的に沖縄に押し付けている」という、本当は「日本が抱えている問題」の実態を学んだという事です。

最寄の小田急線鶴川駅まで先生を迎えに行きました。三線のケースを抱えて改札口に降りてきた先生はとてもしっかりとした方でした。しかしそんな先生の口から語られる数々の沖縄の実態



は、悲しみと、時にはこの日本が沖縄に押し付けている不条理に対する憤りに満ちたものでした。かつて琉球王国であった沖縄は日本に編入され、太平洋戦争では最前線として日本で唯一地上戦を強いられ、徹底的に破壊され、終戦を迎えたと思えば、米軍基地が次々と建設されていく。戦争をその肌で体験し、平和を愛し願う民族であるにも関わらず、ベトナム戦争ではアメリカ軍による殺人基地として協力を強いられる。

初日の学びの後は学校の寮で焼肉をし、そして先生の三線の演奏を聞き、そこで沖縄の文化に触れ、神学生は心を躍らせました。今、日本は沖縄だけではなく福島など様々な問題を抱えています。全ての問題に共通しているのは、いずれも国の政策がその根底にあり、多くの人々の幸せのために少数の犠牲は止むを得ないとする論理です。自分自身も地方出身者として東京で暮らす中で、東京の人々日々の生活と娯楽の忙しさに

埋もれてしまい、政治力や経済力が集中する都市が地方に押し付けている問題を全く自覚していないか、学ぼうとする時間すらないということに気がきます。

しかし「沖縄の問題」は本当は「日本の問題」なのです。辺野古基地建設反対運動に参加している中に沖縄の人ではない人が大勢いるのはおかしいのでは、と抗議活動に疑問を抱く人はこう指摘します。しかしヤマトンチュ（沖縄語で「本土の人」「日本人」）が押し付けている問題だからこそ、ヤマトンチュも共に歩まなければならぬと思います。我々がまず身近にできる事は、「知る事」と「広める事」ではないでしょうか。神学生として、この修養会で学んだ事からこの農村伝道神学校からこれからは発信していきたいと思えます。上地先生、ありがとうございました！



### 追悼

木村勝則牧師



幕張教会牧師 2015.9.17死去

柔和の軌

木村先生を見送って下さった看護師さんが「こんなに立派な方を私は知りません。文句ひとつ言わず、愚痴ひとつぼさず最後までほんとに立派でした。並の方ではありません。」と言われたそうです。

確かに、性格はおおらかであまり怒るところは見ませんでした。抗議をしているときも、怒っているのに不思議と険悪になりませんでした。見せない忍耐があつたのでしよう。これは木村先生の才であつたかと思ひ返して、優しい気持ちになります。教会の敷居を高くせず、難しいものにとせず、自らが野に下って：垣根は限りなく低い牧師であつたのではないのでしょうか。仕える者になりなさい、とのみ言葉を肩肘張らずにできた方なのだと思います。わたしの仲間にも所謂牧師らしい牧師はいません。しかし今、木村先生を顧みて最後まで牧師の仕事に忠実な僕がいたのだと誇りに思っています。

桃山教会 田中孝博

学報

◆一〇月二四日(土)農伝デイ・オープンキャンパスをシオンデイと共に行った。  
テーマ…「土と生きる」講演  
…宮島牧人(原町田教会牧師)



◆今年度神学校日には以下の教会から依頼があり、学生、教師を派遣した(依頼順)。  
埼玉和光教会、上大岡教会、鶴川北教会、川崎戸手教会、生田教会、上星川教会、小諸教会、三鷹教会、巣鴨ときわ教会、池袋西教会、まぶね教会、六角橋教会、竜ヶ崎教会、横浜港南台教会、三一教会、城西教会。  
◆校長は三春教会(佐々木威牧師・福島県三春町)創立一二六周年記念礼拝に招かれ、

礼拝メッセージを行った。

◆一月三日(火・祝)「農村伝道神学校にマサイ族来る!」マサイのくらし」を行った。オレナレイヨ・セイヨ氏、永松真紀氏、早川千晶氏を迎え、自然と深く共生するマサイのくらしのお話を聞いた。マサイが大切にしていることは「大地に境界線を引かない」「天からの水にのみ依り頼む」「死ぬばすべて無になる」ということで、自然との共生というより、自然と一体となった生活ぶりには驚嘆する。▼シャーマンは存在するが、共同体内部に身分制階層制はなく、長老団によるアイデンティティの継承が行われている。国家を形成せず、権力の集中もなく、かなり平等な共同体が形成されていることを知ることができた。▼ただ、今後克服されていかねばならないであろう男女間の差別性は強く感じられた。家庭内での女性の実権はあるものの、強固な男性中心社会であることは否めない。▼基本的に遊牧の生活であるが、最重要課題は子供たちの教育であり、気象の変化による少雨や周辺の都市化が進む中で「マサイのくらし」を大切に継承するための苦闘がなされている。参加者一同深く感銘させられた。  
(高柳)



◆一月一日(水)アジア学院研修生一行来校。交流の時を持った。  
◆一月二五日(水)今年度第一回入学試験。なお、二回目の入試は二〇一六年二月二四日(水)。  
理事・評議員会報告  
神学校と幼稚園の将来計画を総合的に検討するとともに、校地利用を含めた将来計画を

描くために、鶴川学院将来計画委員会を設置した。  
学院の資産について、資金管理運用委員会の審議と理事会・評議員会の議決を経て、規程の一部を見直し、運用先の変更をおこなう。

野津田雑木林の会(代表久保礼子)から要請があり、神学校の家屋一軒を「里山の家」として使用する。神学校が地域との連携を深め、新たな活動を生み出すことを期待している。

神学校の家屋一軒を「黙想の家」に改修することを検討し、土台の修理、リフォーム等の見積をおこなっている。  
(書記 横野朝彦)

「里山の家」開設

「のづた里山の会」に神学校の住宅の一つをお貸しして活動が始められた。この活動の主旨を「案内」から引用してご紹介する。「野津田の里山の中に『自然と人とのつながりの拠点』となる、『のづた里山の家』がオープンします。『のづた里山の家』は農村伝道神学校の地域連携をしたいの思いと、地域の自然を守る活動をしている市民の思いが一致して、『のづた里山の家』として始まります。この場合は地域の課題解決を考える、新しい試みや発信を支援するこ

とを目的に、さまざまな人が出会う場所として活動していく予定です。」

お知らせ

◇アドヴェント礼拝  
二月四日(金)午後五時  
農村伝道神学校礼拝堂  
テーマ…祈りと賛美

メッセージ…植松功氏(黙想と祈りの集い準備会世話人) テゼー共同体の礼拝方式による。どなたもご参加ください。  
◇今年度特別講義  
二月八日(火)・一日(金)  
「禅キリスト教入門」接心」  
講師…佐藤研師  
四日間の接心を行います。実際のプログラムは農伝ホームページをごらんください。  
聴講申し込みは二月一日まで。原則全日参加できる方。聴講料など、合計二万三千元。

農村伝道神学校  
〒195-0063 東京都町田市野津田町 2024  
Tel 042-735-5775 Fax 042-735-5711  
Eメール: noden@pony.ocn.ne.jp  
ホームページ: http://www.noden.server-shared.com  
振替番号  
農村伝道神学校 00160-6-18485  
農村伝道神学校後援会 00120-6-24418